

論 文

〈肉〉のディスクール

——コンラッドの〈健康〉物語——

渡 部 ちあき

目 次

- I. 序
- II. ヴィクトリア朝における人肉食と肉体美
- III. 肉体のユートピア物語
- IV. テキストとイデオロギー
- V. 結

I 序

“Falk: A Reminiscence”¹⁾は1901年5月の脱稿²⁾後、1903年に*Typhoon and Other Stories*に収録されるまで、ついに単独で発表される機会を得なかった。短編も長編もコンラッドの作品はまずイギリス、次にアメリカの雑誌・新聞に掲載・連載のち単行本化されるのが常だった³⁾中で、これはきわめて稀な事態である。編集者に拒否された理由はふたつ、主人公フォークによる難破船上の人食体験告白というショッキングな要素、それにフォークの求婚する美女に台詞が一言もないというドラマ性の欠如であったことを、作者自身が、単行本の序文全体の半量もの紙幅を費して反論含みに説明している。⁴⁾

しかしその暗い題材に反し、この小説の提示する人間観、残す読後感はコンラッドのほかのどの作品よりも明るい。しかもその皓皓たる展望は全人類の過去と未来を照らし、支えるに足るスケールとエネルギーを擁している。ヴィクトリア朝社会の現実・価値観がもつ二重性・二極性のはざまを縫って奇跡のようにできあがったこの「世にも美しい物語」は、絶えず醜さの影を曳くことで、人体をはじめさまざまな事項をめぐる当時のディスクールの陰と陽とを同時に放散する。そしてテキストとイデオロギーの関係、さらにコンラッドの文学的本質までも表出・例証する「美味しい話」なのである。

II ヴィクトリア朝における人肉食と肉体美

“Falk”の拒絶につながったフォークの人肉食と娘の肉体美、それはまさにコンラッドがこの作品で前景化しようとした二点そのものである。ではその背景は、作品の奥に渦巻くものは何なのか。それはほかならぬ進化論であり、ヴィクトリア朝の社会・経済・政治・文化・科学に分かちがたくからまりあうその言説が、この人体の光と影の二側面にどうかぶさっているのか、それをまずは見ておく必要がある。

「人喰い」で特筆すべきは、これが珍奇なものではなく、全く逆に、ヴィクトリア朝ではすっかりおなじみのモチーフであったということである。英

国の海洋発展に伴い、人食は「未開人の蛮行」あるいは「難船の惨劇」として定着し、18世紀にはすでにこれを政治的・娯乐的・芸術的に利用する向きがあった。たとえばスウィフトの *A Modest Proposal* (1729) は貧民児童を食料として輸出すべし、とイングランドのアイランド搾取を風刺したパンフレットである。また現在ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館所蔵のインド製からくり人形「ティプーの虎」(1790年頃の作)は、虎がヨーロッパ人を喰らう姿を彫った等身大の木像が、内蔵されたオルガンで唸りと呻きをあげる仕掛けで、かつて東インド会社博物館の目玉として展示されたこの「愉快」な逸品を見て、キーツは軽妙な詩“*Cap and Bells*”(1819)をものしている。⁵⁾ また大陸の美術ではジェリコーが、1816年の海難事件⁶⁾をテーマに時事性と永遠性の同時表現をめざして「メデューズの筏」(1819)をサロンに出品し、政治的理由から王の不快を買っている。⁷⁾

ヴィクトリア朝にはいと人肉食のトピックは実に多様な媒体・階層・分野に拡大する。探検家・船員・野蛮人など特殊な〈他者〉の異常体験ではなく、庶民の日常生活に頻繁に登場する貧窮・犯罪の一類型として人食事件は、残酷趣味が売り物の雑誌 *Terri fic Register*、煽情的瓦版のプロードサイドはもちろん、*Illustrated London News* や *Harper's Weekly* などの一般雑誌をも賑わした。これらに添えられたリアルで凄惨な挿絵が人食への嫌悪と恐怖を広めた一方で、ローランドソン、クルックシャンクラ風刺画家の銅版画、線描画、水彩画によって人食のイメージは「コミカル」にも普及した。文学においてもその悲劇・喜劇の両側面が採られ、ディケンズの作品で人食の要素が登場するものを数え上げてゆくと、*David Copperfield*、*A Tale of Two Cities*、*Great Expectations* を皮切りに、主要作のほとんどすべてにわたってしまうその多さは驚くべきほどである。児童文学の世界でもこの「禁じられた遊び」は食禁に「楽しま」れる。チャップブック、絵本、童謡、人形劇の中で、青ひげ、赤ずきん、ガリバー、巨人退治のジャックたちと共に、ヴィクトリア朝の子供は人喰いのファンタジーを存分に堪能していたのだ。さらに現実でも、ロンドンならパーソロミュー・フェアにコヴェント・ガーデン、

パリならモルグ街にセーヌ川と、こうした地名には人食のイメージが濃厚に染みついた。そして水浴や授乳、キスといった習慣にまでこれが想起されるに至っていた。⁸⁾

人肉犯罪の実際の拡大に油を注いだのが、実は外科医学と商品経済の発展であった。解剖用屍体の需要は人体の用途と商品価値を増大し、新たな売買目的を生んだ。ローランドソンの「墓地盗掘図」を現在王立イングランド外科医大が所蔵している⁹⁾のも、殺人鬼切り裂きジャックの容疑者に四人までも医師が拳がっていた¹⁰⁾のも偶然ではない。売春婦のたむろす劇場街へイマーケットの別名「人肉市場」¹¹⁾は単なる比喩にとどまらない世間の実態を背負っていたのだ。

そのくせ科学は、思想上は人肉食を極限にまで貶め卑しんだ。進化論ではこれは先祖返り、あるいは退化とされ、この隔世遺伝もしくは劣性遺伝こそ犯罪と狂気の原因である、と社会犯罪学および精神病理学に流用された。¹²⁾ その上ヴィクトリア朝は英国の食生活史上、料理（の概念）が最も発達した時期でもあり、中流家庭にはビートン夫人の料理読本¹³⁾が、また労働者階級向けには女王お付きの料理長が簡単廉価料理指南本¹⁴⁾を著して、普及促進の役をつとめた。さらに鉄道と蒸気船の発達、冷凍技術の進歩は食材の質・量・種類の確保を飛躍的に安定化した。¹⁵⁾ こうした「食の文明化」も人肉食をいっそう「料理先史時代の蛮行」へと引きずりおろす要因となって、進化論に加担した。

こうした複雑多岐にわたる事情こそ、フォークの人食体験物語に錯綜するディスクールであり、また張りめぐらされた伏線でもあったのだ。

フォークが恋い焦がれる娘の肉体美も、同様の力学的、あるいは生態学的な場に置かれ、かつこれを踏まえたものである。

19世紀において女性美の基準は、政治的配慮と社会的状況の変動に伴って劇的な変化を遂げた。1830年代の美のお手本は王女ヴィクトリアの「少女美」である。妖精のように軽く華奢な姿、小さな顔と手足がサッカーやテニスの作品でも讃えられ、おまけに当時の人相学も小ぶりの目鼻立ちを美德と

結びつけた。そのため女性の背は「殿方の心臓を越えてはなら」ず、5フィート4インチ（163cm）の「そびえたつような身長」では結婚は困難だった。女王が即位して1840年代になると美の典型は「チャラチャラ蝶娘」から一転して「質実家庭婦人」となり、1850年代・1860年代を通して「家庭の天使」というお題目とは実はあまりそぐわない質素さと貫禄が、家事方取締役たる女主人には求められるようになり、1870年代にはついに背の高さが美の条件となる。女権拡張運動の勃興やスポーツの興隆と足並みを揃えて1880年代以降支配的となったのが、肩幅・腰幅が広く、筋肉質で顔の造作も大きい「彫像型頑健豊満美女」である。逞しい健康美を尊ぶこの傾向は世紀が変わっても衰えず、エドワード7世即位の頃には「大女族の時代」という言葉まで生まれる。

この「大型美」の模範となった女優が、フランスではサラ・ベルナール、イギリスでは皇太子やワイルドと親交のあった5フィート8インチ（172cm）のりりー・ラントリー、¹⁶⁾ アメリカではリリアン・ラッセルで、フェミニストでもあった彼女は5フィート6インチ（168cm）・165ポンド（75kg）の堂々たる体軀だった。¹⁷⁾ またアイルランド独立運動の闘士でイエイツの美神でもあったモード・ゴン、¹⁸⁾ ならびにパートランド・ラッセルの愛人だったブルームズベリー・グループの^{フラミンゴ}紅鶴レディ・オトーライン・モレルは、いずれも6フィート（183cm）の長身である。ロレンスの *Women in Love* のハーマイオニのモデルである¹⁹⁾ このモレル夫人は1989年に発見された彼女の日記により、チャタレイ夫人のモデルでもあったことが判明している。²⁰⁾

この移行は人気スターのタイプ²¹⁾ のみならず衣服にも起こり、1830年代にはフリルとレースがたっぷりですカートも派手に膨らんでいたのが、1890年代には無駄のないタイトなシルエットになる。²²⁾ 髪型も、可憐さと低さを強調する垂らし^{トレス}巻毛は廃れ、活動性と高さのポイントを置いたボンパドゥール型^{アップ}束髪が主流となる。²³⁾ このトレンドはポスターなどの商業広告を介して庶民にもゆきわたった。²⁴⁾

だが流行とは決して最大公約数や平均ではなく時代の最先端、時には異端

であって、往々にしてまず大多数の保守派の眉を顰めさせる、という構図を忘れてはならない。美の型のこうした推移は、現代の目からは時代の成熟、個体の成長、また種の進化との類比関係で眺められても、²⁵⁾ 当時の生物学者たちの反応は、この変遷に「個体発生は系統発生を反復する」というパターンを認めるどころか、この趨勢は「男は大きさ・強さで、女は小ささ・弱さで互いに相手を引きつける」という性選択の原理に反するものと断じ、²⁶⁾ 勢力を増すフェミニストたち²⁷⁾ への大方の反感に与する、時代の情緒に多分に影響されたものであった。さらに「巨人は劣性形質の発現であり先祖返り」と主張する人類学者すらいたが、これが実はヴィクトリア朝の作家・科学者にはほぼ共通の見解とあってよく、このコンセンサスを支えていたのが見世物小屋のフリーク・ショーの伝統であった（ただし巨人のプロでやっていくには女の場合7フィート（213cm）が必要だった²⁸⁾ のだが）。そのため美術においてもラファエル前派の肉感的な長身の美女はフリーク的²⁹⁾ かつ不道徳³⁰⁾ と受け取られた。タイタニック号から生還した強さで売れた「不沈女優」モリー・ブラウンですら5フィート8インチの長軀に似合わぬ小さな手足を自慢にしていた³¹⁾ ことにも、この反動的感性の根強さがうかがえる。

“Falk”に登場する娘の「美」は、このようなファッションとイデオロギーの戦場の只中に成立することを求められていた。コンラッドにとってこのカップルは、共にそれぞれに絡みつく刺草をかきわける、ディスクールの探検家の位置を与えられていたのである。

III 肉体のユートピア物語

“Falk”は神話である。そのキャラクターの平俗な設定は豪華な描写により天駆けるまでの昇華を遂げる。東洋のある入江の曳航船船長と停泊中の帆船船長の姪が、この物語では英雄と女神として祀られ、神話の比喻が惜し気もなくふんだんに捧げられるのだ。

偉丈夫フォークの隆々たる壮軀はヘラクレス、その白いズボンに純白の船に融けて人船一体のケンタウロスの観をなし、スカンジナビアの血はヴァイ

キングをおも憶わせる。その名“Falk”は人食の具“fork”を響かせつつ、³²⁾ヘブライ語で“falcon”³³⁾すなわち肉食の猟禽、鷹を意味する。堅く真直にそびえる逞しい胴はまた樹幹に比され、脚韻する“stalk”をもその名に宿して河畔のグレート・バゴダ「大塔」と並び立つこの勇者は、「生命の木」の顕現と崇められる。

対する娘は王侯の贅もかくや、圧倒的な大きさと均整の、若くかつ完全に成熟した身体に、月光の如き静穏なまなざしを浮かべた月の女神ダイアナ、海の男を魅惑する精セイレーンである。異教的敬虔をすら喚起するこのオリンピアの女神はまた、生命感みなぎる「若き地球の寓意」であり、人類の将来への希望を見る者に持たせ、流す涙は春の雨、母なる自然そのもののこの娘にもはや名は無用、「ヘルマンの姪」とよりほかに呼ばれることもない。

神話を援用して永遠の原型へと純化するコンラッドの語りに、当時上梓されたフレイザーの *The Golden Bough* (1890) による文化人類学の刺激があったことは、この大著の冒頭、ダイアナの祭司継承をめぐる金枝の伝説³⁴⁾との照応からも容易に窺える。しかしより重要——そして不穩——なのは、進化の梯子の下段に蹴り落とされてこそ存在を許されていた「人喰い」と「大女」を、その「変化」の梯子すら届かぬ「不変」の神の高みへと一気に引き上げてしまったことなのだ。

しかもこのふたりはダーウィンの生物界、および地球の歴史そのものまで遇されている。進化の究極・代表存在たるにふさわしいよう、コンラッドによる両者の肉体描写は「神々しさ」の頌歌のみならず、「生存最適者」の生物学的記述にもなっており、その「男らしさ」「女らしさ」の表現をはじめとして至る所で、ダーウィンの *The Descent of Man* における記載を正確かつ入念になぞっている。³⁵⁾ さらにフォークを当地で唯一の蒸気エンジンの持ち主として、技術の進歩と発明の流行に沸き立ったヴィクトリア朝³⁶⁾の科学の最先端に据え、その優位を強調している。コンラッドの配慮は社会のダブル・スタンダードにも及び、背丈・肉付きの豊かで体にぴったりした服の「新しい女」を担ぎ出す一方、この運動選手タイプに一番近い体型を持

つ狩りの女神ダイアナをひいたことには、ヴィクトリア朝の教養階級の画家たちが自らの古典の素養を披瀝し、かつヌードに品と正当性を付与すべく好んでギリシャ・ローマ神話に材を採った傾向³⁷⁾に倣う、保守的な弁明の意図も匂っている。

そして“Falk”はおとぎばなしである。そのプロットは王子と美姫のロマンスのパターンを幾重にも織り込んでいる。両親を亡くし叔父のもと家事と育児にいそむ境遇は継子シンデレラ、編んで腰まで垂らした多量の金髪は塔上のラプンツェル、永遠に縫い物を続ける姿はオデュッセウスを待つペネロペー、人喰い告白すらもこのいばら姫を獲得するための試練・功業としてなんなく組み込まれ、美女と野獣のイメージへと飼い馴らされて“live happily ever after”という決まり文句におさめられる。ラスキン、ディケンズ、ワイルドらの大家も子供向けに童話を書いた、おとぎばなし全盛のヴィクトリア朝の文壇³⁸⁾の空気、さらにはその詩歌版である、子供の活躍、海の冒険、愛や夢を語る“parlour poetry”³⁹⁾が朗読され詠唱される食後の居間の雰囲気、ここには息づいているのである。特にこの「お茶の間歌謡」のひとつ、「みなしごアニー嬢ちゃん」⁴⁰⁾は孤児の姪の母胎とも言うべき流行歌である。

だが同時に苛酷と猥雑を極めてもいたヴィクトリア朝の社会的現実の中にあって健全な「おとぎばなし」をうちたてるのは容易なわざではない。そのためコンラッドは、実態と規範の乖離と共存、世俗と高雅の拮抗と葛藤を、注意深くよりわけ、すりぬけ、綱渡りしてみせる。

物語の序幕、夕暮れのテムズのほとりに集う船員たちのよもやま話のなごやかさ、しかし19世紀にはこの船着場はだれもが恐れる酒・売春・暴力・殺人・阿片の渦巻く悪の巣窟だったのだ。⁴¹⁾だが語り手の目は腐臭こもる河岸を避け、ひたすら眼前の食卓、川の流れ、行き過ぎる船にのみ注がれて、副題でもある「回想」がフォークとの出会い、悠久の人類の歴史、太古の食事へと雄大に馳せられる。⁴²⁾

また競争相手のいない独占業者フォークの殿様商売は、世知辛く計算高い

ホテル主人ションバーグ、船賃節約のため姪を手放すドイツ人ヘルマンの吝嗇と明らかな対照をなし、マルクスの『資本論』の出た19世紀後半の経済の渦を遙かに逃れ、巷間の労働の垢を免れている。

ひるがえって娘の献身的な勤労は、ヴィクトリア朝の家事使用人の厳しい基準⁴³⁾にも合格する「女中の鑑」と誉めていい。洗濯物で船を文字通り満艦飾にするさまは、「屋外に洗濯物を干してはならない」というイギリスのブルジョアのしきたり⁴⁴⁾には反するものの、清潔好きのドイツの主婦ヘルマン夫人の助手として免責され、かつ公衆衛生の向上が謳われ視察官が巡回までした⁴⁵⁾当時のイギリス労働者階級の範ともなる感心な心掛けである。しかもこの十九の娘の寡黙と生气は、三十過ぎの哀れな売れ残り貴婦人ヴァンロウ嬢のセンチメンタルな歌とピアノに対比され、余ったスピンスターのだぶつく当時の英独の結婚市場⁴⁶⁾を生き抜く勝者として、階級差をも乗り越えて輝くのである。

そしてフォークの求婚は、ヴィクトリア朝の厳格な、とりわけこの件にはやかましいマナー⁴⁷⁾を、行儀良く遵守している。まず叔父ヘルマンにアプローチするのも、香港に高価な指輪を注文するのも、世紀末においてすら古風すぎて時代遅れとされていた「先ず父親或は此に準ずる近親の許可を請い、裁可されたる折には直ちに婚約指輪を婦人に与うべし」⁴⁸⁾を満たす。この金科玉条の裏にはびこるイギリスの性的現実、階級を問わぬ放埒・乱脈・破廉恥の跋扈蔓延と性犯罪の頻発⁴⁹⁾に照らすとき、フォークの純情と清廉は賛嘆と驚愕を呼ぶ。その上、この海の男の振舞は伝統的な海賊の求愛の掟、「思慮分別ある女と会った場合、当該人の同意なしに手出しを試みた者は即刻死刑に処す」⁵⁰⁾にも適い、これもまた実際の掠奪と凌辱の前に空文となっていた中、フォークの律儀が光る。そもそも「女」を愛すること自体、海陸共に永く広く行なわれ罰せられてきた同性愛が一大社会問題となっていた世紀末⁵¹⁾においては、推奨・称揚さるべき「健全」なのである。

このように一見申し分ない紳士のフォークが一貫して無視するのは、「言葉」の規範である。「直接本人が話すべし」⁵²⁾もものかは、それまで仲たが

いていた「私」に「話してくれるか」ととりなしを頼むほど。手紙とカードのやりとりの作法と表現が発達と洗練を極めたこの社交の時代⁵³⁾にありながらフォークの手管は、ただじっと黙って愛する人のそばに何時間も座り続けることのみ。ショーンバーグの饒舌を徹底的・生理的に忌み嫌うフォークと慎ましい無口な娘、ドイツ語の話せない彼と英語の話せない彼女は、一言も言葉を交わすことなくお本能的に理解しあい、叔父への人食告白の修羅場も乗り越えて結ばれる。無言で向かいあい手を取りあって陽光の中メイン・マストと並び立つラスト・シーンのふたりの壮麗な姿は、言葉に頼る一切のものの不要を宣する碑となっている。

「言葉」の規定する概念、思想、そうした全てが、無言の「必要」、「熱情」、自己保存本能と仮借ない生の絶対法則の前には風塵と帰す。それゆえフォークの人食はただ「不運」であるのみ。宗教的にも「贖罪」の対象どころか聖人の「受難」にあたることを、フォークのファースト・ネームの「クリスチャン」とその「修道士のような」容貌が語っている。同時代に起こっていた精神分析学的に見ても、フォークは「異常な体験が終生尾を引くほどの十分な感受性の持ち主」⁵⁴⁾と設定され、その印が「身震いしながら両頬を撫で下ろす癖」になる。すなわちフォークは、フロイト的なトラウマをダーウィンのように生きのびるのみ。「立派な起源を持つ」蒸気船の故障という科学の失敗から起こった彼の人食事件、その原因と解決はきわめて「現代」的でもあり、どの方面からも「野蛮」のさげすみを受けるいわれはない。それどころか自然主義が恐れてきた宇宙法則の、明るい積極面を開示すらしているのである。

「生」のみに一心に従う“Falk”の表現は、コンラッドの他作品のように拡散する象徴ではなく、収束する寓意がリードをつとめる。その筋立ても、いつものように読者を不安の只中に放り出すのではなく、予定調和——あるいは予定外の調和——のもとに落ち着かせる。そこにはほとんどヒューマニズムと言っていい人間本性への賞賛と祝福がある。ただこの「永遠の真実」は当時の一般には理解と共感の域を越え、相当に「異様」な像を結んでしまっ

てもいたのである。

Ⅳ テクストとイデオロギー

“Falk”はテキストに及ぶ二つのレベルのイデオロギー作用を見事に表出する作品である。ひとつは作者と読者によって「念頭に置かれ」「想起され」「利用され」あるいは「抑圧され」る、有形のイデオロギーである。意識されるこの可視の有機体がいかにもぶされ、あるいは避けられてテキストの成型に影響するかは、すでにⅡ・Ⅲで論じた。ここで問題としたいのは、もうひとつ、表現行為自体のイデオロギー機能、すなわちテキストの生成そのものを支配する無意識・無形・不可視のネットワークである。

無口で無表情、ヴィクトリア朝的“respectability”へのこだわりをも見せるフォークをギリシャ的に英雄化・神格化しているのは、実は語り手「私」の言語表現というイデオロギーなのだ。テキストの構図は、画面の大半を船長就任早々「私」が出くわす契約不履行・職務怠慢・賄賂・横領・窃盗などの低俗な面倒トランプルの「くだらなさ」が占め、同じく船長初航海でフォークが遭遇した人食事件の絶対的逼迫が画竜点睛をなすデザインとなっている。そしてテキストの筆致タッチは、「馬鹿馬鹿しさ」「生」「美德」「罪の無い」「不運」などの主要語を幾度も執拗に繰り返す、朴訥なまでの「芸の無さ」である。ヴィクトリア朝小説におけるキー・ワード鍵語は背後に因果関係の糸を引き、連関の曲芸を忍ばせて微妙な足場に爪先立つ、含みに富んだ繊細巧緻な細工であった。だが“Falk”における基本語は、何の謎かけも種明かしも持たぬ単純・純粋な一筆の色たるのみ、この主彩の単位をただひたすら淡々黙々と画布に置き続け塗り重ねていくことで、素朴かつ強烈な光と生命を放つ全体が仕上がっていく。この画風は、まさしく19世紀後半に出現した印象派絵画の技法であり、論理や主義を超越した生の絶対法則の単純・強靱な力をこの小説で描くのに最適の技法でもあった——たとえ印象派の登場⁵⁵⁾同様、受け手の理解と好意には恵まれなかったとしても。

“Falk”における語り手の介在は、「表現者」の持つネットワークと方法

の恣意性を明確に意識させ、これが入れ子構造の核となって外被を累増する。「語り手が語られる」この作品自体、作者コンラッドのイデオロギーに限取られたもの、そして英語で言えること、さらには言語の網ですくいあげられる範囲のもののみでできているのだ、幾重もの表象のふるいをかけられその度にイデオロギー操作を受けているのだと、如実に示唆している。

プロパガンダやプロテストなど狭義の政治文書・政治文学に限らない、言語行為そのものが政治的でありイデオロギー装置であることを、ポスト構造主義、とりわけマルクス主義批評は明らかにした⁵⁶⁾が、コンラッドのテキストはこの「政治的無意識」を意識的に例証するメタ言語・メタ批評的特性をも孕んでいると言っている。

この非凡なパフォーマンスを可能にしたものは、「書くという行為は特定の効果を生まんとする企図に先導された知性の所為であり……私の作品は確たる意図という堅牢な礎を持つものである」⁵⁷⁾と「意識」を重んずる作家としての姿勢もさることながら、何よりも、外国人としての他者性が生む「距離」によって、英国人が埋没し一体化しているディスクールをかなりの程度異化できたことである。つまりコンラッドにとってのヴィクトリア朝の状況は、作家が無意識に準拠し反映してしまう「素地」や「土台」であるよりも、意識的に踏みしめ闘う場としての「リング」であり「標的」ですらあった。それゆえ、その作品がそこに「なじま」ず「浮い」たこと自体が、同化の失敗ではなく異人のメリットの保持・達成を示しているのである。

V 結

“Falk”は世紀末の濼洋にまみれつつも新世紀の清晨の気に満ちた昂然たる英雄譚である。なかんずく「去勢男を破滅させる男根女を描く女嫌い」⁵⁸⁾との悪名高いコンラッド、最近のフェミニズムからの読み直しによっても「周縁性を共有する女の同志」⁵⁹⁾がせいぜいのこの小説家が、女性をかくも手放しで礼賛した作品は後にも先にもこれ一作と言っている。次作“Amy Foster”では言葉の通じぬ恋人同志がそれゆえに破局を迎え、続く

“To-morrow”では大柄な娘が船長ならぬ元船大工の盲目かつ暴君の父に仕え、戸外の物干しを隣人に疎まれ、男に騙され棄てられて「明日」を失い、*The Secret Agent*では豊満艶然たる肢体の若妻が夫を殺す……痛めつけられ墜ちていく一方の「ヘルマンの姪」像の末路は悲惨である。「生の絶対法則」に生かされた主人公も、社会機構の強大な政治力の前にあえなく蹴散らされていく卑小な個人が持ち役となる。この凋落を見下ろす“Falk”は、20世紀の新たな暗雲と嵐を呼ぶ紫電一閃でもあったのである。

註

- 1) Joseph Conrad, “Falk: A Reminiscence,” *Typhoon and Other Stories* (1903) in *The Works of Joseph Conrad, the Uniform Edition, Vol. 7* (London and Toronto: J. M. Dent and Sons Ltd, 1923).
- 2) Owen Knowles, *A Conrad Chronology* (London: The Macmillan Press Ltd, 1989), p. 43.
- 3) Jocelyn Baines, *Joseph Conrad: A Critical Biography* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1960; Harmondsworth: Penguin Books Ltd, 1986), pp. 541–550.
- 4) Conrad, “Author’s Note,” *Typhoon and Other Stories*.
- 5) Julius Bryant, *Victoria & Albert Museum Guide* (London: The Victoria and Albert Museum, 1986), p. 89.
- 6) Hansen W. Baldwin, *Sea Fights and Shipwrecks: True Tales of the Seven Seas* (New York: Hanover House, 1956). 『海戦・海難 七つの海の真実の物語』、実松 譲・訳 (フジ出版社、1972)、279–311頁。
- 7) 朝日新聞取材班、『世界名画の旅2』 (朝日新聞社、1986)、48–53頁。
- 8) Harry Stone, *The Night Side of Dickens: Cannibalism, Passion, Necessity* (Columbus: Ohio State University Press, 1994), pp. 1–268.
- 9) *Ibid.*, p. 163.

- 10) Daryl Sullivan and Andrew Cockell, *Jack's London* (Mitcham: Geonex UK Ltd, 1993).
- 11) 高橋裕子・高橋達史、『ヴィクトリア朝万華鏡』（新潮社、1993）、132頁。
- 12) Cynthia Eagle Russell, *Sexual Science: The Victorian Construction of Womanhood* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1989), pp. 67–68. 『女性を捏造した男たち——ヴィクトリア時代の性差の科学』上野直子・訳、富山太佳夫・解題（工作舎、1994）、92–93頁。
- 13) Isabella Beeton, *Beeton's Book of Household Management* (London: S. O. Beeton, 1861).
- 14) Charles Elmé Francatelli, *A Plain Cookery Book for the Working Class* (London: Bosworth and Harrison, 1816; Whitstable: Pryor Publications, 1993). なおコンラッドも妻ジェシーの出版した料理本 *A Handbook of Cookery for a Small House* (1923) に序文を書いており、これが“Cookery”として *Last Essays* (1926) に収録されている。
- 15) C. Anne Wilson, *Food and Drink in Britain: From the Stone Age to the 19th Century* (Chicago: Academy Chicago Publishers, 1991), pp. 418–419.
- 16) Allison Kyle Leopold, “The Victorian Ideal of Beauty,” *Victorian Homes*, Vol. 9 Issue 4 (Fall 1990), pp. 6–8; Vol. 10 Issue 1 (Winter 1991), pp. 8–9; Vol 10 Issue 2 (Spring 1991), pp. 10–11; Vol. 10 Issue 3 (Summer 1991), pp. 22–23; Vol 10 Issue 4 (Fall 1991), pp. 24–26.
- 17) Carolyn Flaherty, “Lillian Russell: Fashionable, Flamboyant and a Feminist”, *Victorian Homes*, Vol. 1 Issue 3 (Summer 1982), pp. 20–21.

- 18) 野島秀勝、『迷宮の女たち』（TBSブリタニカ、1981）、266-339頁。
- 19) Quentin Bell, *Bloomsbury* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1968). 『ブルームズベリー・グループ』、出淵敬子・訳（みすず書房、1972）、46頁。
- 20) Miranda Seymour, *Ottoline Morrell: Life on the Grand Scale* (London: Hodder & Stoughton, 1992). ロレンスの「生の哲学」は、このような「時代の肉体」性を抜きには語れまい。
- 21) Alexander Schouvaloff, *The Theatre Museum* (London: Scala Publications Ltd, 1987), pp. 26-27, 45, 49-50, 53, 138-143.
- 22) Shelly Tobin, *Fashion Album: Images of Fashion from the Collections of the Royal Pavilion, Art Gallery and Museums, Brighton* (Brighton: The Royal Pavilion, Art Gallery and Museums, Brighton, 1991), pp. 2-8.
- 23) ポーラ文化研究所・編、『西洋のヘア・ファッション——文献解題と目録——』（ポーラ文化研究所、1988）、8-11頁。
- 24) Michael Jubb, *Cocoa & Corset: A Selection of Late Victorian and Edwardian Posters and Showcards from the Stationers' Company Copyright Records Preserved in the Public Record Office* (London: HMSO, 1984), pp. 9, 14-17, 34-37, 69, 71, 75-77.
- 25) Leopold, Vol 9 Issue 4, p. 8.
- 26) Russell, pp. 104-180.
- 27) Barbara Caine, *Victorian Feminists* (Oxford: Oxford University Press, 1992)
- 28) Leslie Fiedler, *Freaks: Myths and Images of the Secret Self* (New York: Simon & Schuster, 1978). 『フリークス 秘められた自己の神話とイメージ』、伊藤俊治、且 敬介、大場正明・訳（青土社、1986）、103-131頁。
- 29) Leopold, Vol. 10 Issue 2, p. 11.

- 30) Julian Treuherz, *Victorian Painting* (London: Thames and Hudson Ltd, 1993), pp. 131–133.
- 31) Katharine Conley, “Molly Brown: The Pride of Young Denver”, *Victorian Homes*, Vol. 2 Issue 1 (Winter 1983), p. 30.
- 32) Redmond O’ Hanlon, “Knife, *Falk*, and Sexual Selection,” *Essays in Criticism*, Vol. 31 No. 2 (April 1981), p. 127 ではこれを単に言語上の連想としているが、作品中、人食の前触れのシーンにも “But there was a ship...with...knives, forks...glass and china, and a complete cook’s gallery...possessed by the pitiless spectre of starvation” とあり、この予兆が “Falk” の名を通じて表題にまで遡及するよう、構成上の企図をも含んだ命名であることがわかる。コンラッドのこうした仕掛け含みの題名使いについては、渡部ちあき、「翻身するテキスト——コンラッドにおけるコメディとパロディ——」、『白鷗女子短大論集』、第20巻第1号（1995）、1–16頁を参照のこと。
- 33) Stan Jarvis, *Discovering Christian Names* (Princes Risborough: Shire Publications Ltd, 1993), p. 39.
- 34) ジェームズ・G・フレイザー、『金枝篇（一）』、永橋卓介・訳（岩波書店、1966）、37–52頁。
- 35) O’ Hanlon, pp. 127–141.
- 36) Leonard de Vries, *Victorian Inventions* (London: John Murray, 1991). Kenneth Chew and Anthony Wilson, *Victorian Science and Engineering Portrayed in The Illustrated London News* (London: The Science Museum, 1993).
- 37) Ronald Pearsall, *Tell Me, Pretty Maiden: The Victorian and Edwardian Nude* (London: Grange Books, 1992), pp. 161–165.
- 38) Michael Patrick Hearn (ed.), *The Victorian Fairy Tale Book* (New York: Pantheon Books, 1988).
- 39) Michael R. Turner (ed.), *Victorian Parlour Poetry: An Annotated*

Anthology (New York: Dover Publications, 1992).

- 40) James Whitcomb Riley, “Little Orphant Annie,” *The Old Swimmin’ Hole and ’Leven More* (1883) in Turner, pp. 19–20. このキャラクターは現在も Harold Gray の漫画 “Little Orphan Annie”、ミュージカル *Annie* に生き、L. M. Montgomery の Anne もこの系譜に連なる。
- 41) Gustave Doré and Blanchard Jerrold, *London: A Pilgrimage* (London: Grant & Co., 1872). 小池 滋・編著、『ドレ画ヴィクトリア朝時代のロンドン』（社会思想社、1994）、18–19頁。
- 42) この語り出しのパターンは “Heart of Darkness” でも使われており、人類の原初の美徳へ帰着する “Falk” と反対に、悪徳の方に行き着く。
- 43) Frank Victor Dawes, *Not in Front of the Servants: A True Portrait of Upstairs, Downstairs Life* (London: Random Century Group Ltd, 1989). Satenig S. St. Marie, “The Vitorian Servant: Romance and Reality,” *Victorian Homes*, Vol. 7 Issue 1 (Winter 1988), pp. 32–33, 93; “The Lady and her Servants,” *Victorian Homes*, Vol. 9 Issue 1 (Winter 1990), pp. 6, 90–91.
- 44) ジョン・セイモア、『図説イギリスの生活誌 道具と暮らし』、小泉和子・監訳、生活史研究所・訳（原書房、1989）、97頁。
- 45) F. M. L. Thompson, *The Rise of Respectable Society: A Social History of Victorian Britain 1830–1900* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1988), pp. 356–357.
- 46) 北條文緒、クリア・ヒューズ、川本静子・編、『遙かなる道のり イギリスの女たち1830–1910』（国書刊行会、1989）、90頁。スピンスターの典型的なイメージには、これに不細工な容貌が付け加わる。
- 47) Censor, *Don’t: A Manual of Mistakes & Improprieties More or Less Prevalent in Conduct & Speech* (London: Field & Tuer, Y^e Leadenhalle Presse, E. C., circa 1880; Whitstable: Pryor Publications, 1982). Satenig S. St. Marie, “The Greatest Moments in a Girl’s Life,”

- Victorian Homes*, Vol. 8 Issue 2 (Spring 1989), pp. 28–30, 96.
- 48) Mrs Humphry, *Manners for Men* (London: James Bowden, 1897; Whitstable: Pryor Publications, 1993), pp. 108–109.
- 49) Françoise Barret-Ducrocq, *Love in the Time of Victoria: Sexuality and Desire among Working-Class Men and Women in Nineteenth-Century London*, John Howe (trans.) (Harmondsworth: Penguin Books, 1992). Anonymous, *My Secret Life* (1888; New York: Blue Moon Books, 1988). Steven Marcus, *The Other Victorians: A Study of Sexuality and Pornography in Mid-Century England* (New York: Meridian, 1974). 『もう一つのヴィクトリア時代 性と享楽の英国裏面史』、金塚貞文・訳 (中央公論社、1990)。Judith R. Walkowitz, *City of Dreadful Delight: Narratives of Sexual Danger in Late-Victorian London* (Chicago: The University of Chicago Press, 1992).
- 50) Captain Charles Johnson, *A General History of the Robberies and Murders of the Most Notorious Pyrates, and Also their Policies, Discipline and Government, from their First Rise and Settlement in the Island of Providence, in 1717, to the Present Year 1724* (1724). 『イギリス海賊史下』、朝日奈一郎・訳 (リプロポート、1983)、11頁。David Cordingly and John Falconer, *Pirates: Fact and Fiction* (New York: Cross River Press, 1992), pp. 98–99.
- 51) B. R. Burg, *Sodomy and the Pirate Tradition: English Sea Rovers in the Seventeenth-Century Caribbean* (New York & London: New York University Press, 1983). 土屋恵一郎・編、『叢書・イギリスの思想と文化 ホモセクシュアリティ』、富山太佳夫・監訳 (弘文堂、1994)。Jeffrey Weeks, “Inverts, Perverts, and Mary-Annes: Male Prostitution and the Regulation of Homosexuality in England in the Nineteenth and Early Twentieth Centuries,” *Hidden from History: Reclaiming the Gay and Lesbian Past*, M. Duberman, M. Vicinus and G. Chauncey,

- Jr. (eds.) (Harmondsworth: Penguin Books, 1991), pp. 195–211.
Martha Vicinus, “Distance and Desire: English Boarding School Friendships, 1870–1920,” *ibid.*, pp. 212–219. Kellow Chesney, *The Victorian Underworld* (London: Maurice Temple Smith, 1970). 『ヴィクトリア朝の下層社会』、植松靖夫、中坪千夏子・訳（高科書店、1991）、356–359頁。
- 52) Mrs Humphry, p. 108.
- 53) *What Shall I Say?: A Guide to Letter-Writing for Ladies* (London: James Boeden, 1898; Whitstable: Pryor Publications, 1994). Allison Kyle Leopold, *Victorian Keepsake: Select Expressions of Affectionate Regard from the Romantic Nineteenth Century* (New York: Doubleday, 1991). Pat Ross, *With Love & Affection: The Sweet Nellie Book of Traditional Sentiments & Tokens of Romance & Friendship* (New York: Viking Studio Books, 1990); *I Thee Wed: The Sweet Nellie Book of Wedding Tradition & Sentiments* (New York: Viking Studio Press, 1991).
- 54) Conrad, “Author’s Note”.
- 55) Ian Dunlop, *The Shock of the New: Seven Historic Exhibitions of Modern Art* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1972). 『展覧会スキャンダル物語』、千葉成夫・訳（美術公論社、1985）、61–191頁。
- 56) Fredric Jameson, *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act* (Ithaca: Cornell University Press, 1981). Terry Eagleton, “Text, Ideology, Realism,” *Literature and Society: Selected Papers from the English Institute, 1978*, Edward W. Said (ed.) (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1980), pp.149–173.
- 57) Conrad, Letter to Blackwood, 31 May 1902, in Baines, pp. 342–343.

渡部ちあき

- 58) Bernard C. Meyer, *Joseph Conrad: A Psychoanalytic Biography* (Princeton: Princeton University Press, 1967), pp. 174, 232.
- 59) Ruth L. Nadelhaft, *Joseph Conrad: A Feminist Reading* (Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf, 1991), pp. 134—135.